

神隠し

和光高等学校 二年

高橋 たかはし 結衣 ゆい

この時期の恩田川沿いは賑やかだ。

カメラの前でピースをする中年の女性、寄り添うように佇む老夫婦。小さな子供を抱き上げる父親と、両手で枝を掴む娘。その様子を目尻を下げて見守る母親。ちび、と聞こえた鳥の声は僕の横を走り抜けた子供の笑声でかき消された。

咲き乱れる花の中に、ふと、見慣れた後ろ姿を見つけた。長い黒髪を揺らして歩く、水色のブラウスの彼女は間違いなく。

「佐倉先輩！」

思わず彼女の名前を呼ぶ。振り向いた先輩は僕を見て目を丸くし、それから花開いたように微笑んだ。

「橘くん」

優しい声が耳に届く。僕は胸を高鳴らせながら彼女のそばへと駆け寄った。

佐倉先輩。明るくて可愛い、僕の女神様。

この辺りに住んでいると言っていたけれど、まさかこんなところで会えるなんて！

桜の木の下で立ち止まった僕たちの間を風が通り抜ける。隣に立つ彼女をこっそり窺うと、風に揺れる長い髪の毛先が頬にかかり、甘い香りが鼻腔を刺激した。なんて綺麗な桜なんだろう。

ぼんやりと先輩を見つめていると、不意に彼女がこちらを見た。ばっちり目と目が合ってしまった、慌てて目を逸らす。空の青と雲の白、春色の光を映し煌めく恩田川。その水面に触れてしまいそうなほど枝を伸ばした桜は満開で、これ以上ない花見日和だった。

視界の端で彼女が口を開くのが見えた。

「ね、橘くんは桜好き？」

大好きです。あなたみたいだから。胸の中からぼろっと生まれた言葉をぐっと抑えて言葉紡ぐ。

「えっと、好きです。綺麗なんで。先輩は桜好きですか？」

「私はね、苦手」

こっちのほうが好きよ、と付け足し、先輩は植込みに咲く橘色のツツジをつつく。日陰に入った彼女の、風に揺れた白いスカートに黒い桜模様の影が差した。

教育長賞
高橋結衣「神隠し」

「桜ってね、神様が憑依する木だって言われてるの。稲作の神様の倉。だから桜」

そう呟く先輩の瞳には、胸が苦しくなるほど綺麗な薄紅色が映っている。彼女の口紅と同じ色。その瞳に映るのは僕だけでいいのに。形の良い唇からまた音が溢れる。

「満開になると大人も子供もみんな浮かれておかしくなっちゃうでしょう？ それこそ、神様に誑かされるみたいに。私は、何かに囚われたくない。狂いたくなんかない」

だから苦手、と笑う先輩が、どこか遠いところへ行ってしまうそうだと思った。彼女は一步も動いていないというのに。ちらりと見えた川面は、風に煽られさざ波が立っていた。キッキツというカワセミの声がやけにはつきりと聞こえて、慌てて口を開く。今から僕が言うことは、その、桜の神様に誑かされたと思って聞いてください。

「案外、誑かされるのも悪くないですよ。優しくて綺麗な花だから。囚われてしまってもいいかな、なんて」

先輩の視線が僕の目を捕らえる。吸い込まれてしまいそうなほど澄んだ瞳に、今度こそ僕だけが映った。

「僕は桜が、佐倉先輩が好きです」

今しかないと思って、半分勢いで言い切った。

驚いたように目を見開いた後ふわりと笑みを浮かべた彼女は、今まで見たどんな桜よりも美しかった。

「そっか」

彼女はゆつくりと僕のほうへと歩み寄る。一步、二歩。

「橘くん、わたしに、桜に攫われてよ」

両手を差し出し満開の笑みを浮かべる彼女の言葉にしっかりと頷き、その手をぎゅっと握り、はい、と答える。花嵐が吹いた。びゅうびゅうと走り抜けていく空気に、薄紅と白とも言えない淡い色彩が混ざり合う。

あまりの強風に思わず目を閉じて、開く。気づけば真っ暗なところに一人佇んでいて、なに、と呟いた。

「君が言ったんじゃない。桜に誑かされるのも、囚われるのも、悪くないんでしょう？」
どこからか、女性の声が聞こえる。覚えているのは満開の桜と、誰かの手の温もりだけ。

教育長賞
高橋結衣「神隠し」

審 査 員 講 評

恩田川の桜の美しさが、ストーリーだけでなく耽美な文体で表現されています。読んでいて心地いいリズムと細部の言葉選びが光っていました。匂いや風を感じる巧みな情景描写です。桜の儚さがキャラクターにうまく投影されていて、とハッとするようなラストの余韻も味わい深かったです。

—— 藤岡 みなみ